



政治部記者にも毒は回っている (写真はイメージ)

ではこの悪習に染まらなければ、上司に疎まれて出世できないとまでいわれていた。

これだけでは終わらない。主に自民党の経世会周辺で、「就職陳情」と呼ばれるものがあつた。後援会の支援者から、息子・娘を何とか就職させてくれと頼まれた政治家たちが、新聞・テレビへの就職の口利きをしていたのだ。私は秘書時代にそうした事例をいくつも見聞きしてきた。就職したその子供たちが、スター

トからして「色が消えたスパイ」さながらに行動することはいうまでもない。

機密費を介した「共犯関係」は、自民党政権を通じて強固に構築されてきた。

秘書官が私に告げた、「メディア全体が悪」とは、この巨大な構造そのものを指す。元参院議員の平野貞夫氏が、「私は新聞記者を墮落させる仕事をしてきた」と語った理由もわかりだ

ろう(朝日ニュースター「ニュースの深層」5月18日放送)。

官房機密費問題を新聞・テレビが報じられないのはもはや当然だが、気になるのは官邸側だ。平野博文官房長官は機密費の使途公開について、政権発足後、今に至るまで動き始める気配

は全くない。私はかねてより、機密費の公開については、一定期間後に、安全保障にかかわる範囲を保全した上での公開の枠組み作りが必要だと主張してきた。

私は5月17日、小沢一郎民主党幹事長の定例会見の席で、野中広務氏の機密費発言についての見解と、機密費の是非について質問した。小沢幹事長は、「私は官房機密費を使う立場には

今まで、立っておりません。従いまして、今のご質問については、まったく答えるだけの知識はありません」とした上で、「機密費という言葉がいかに、怪しげに聞こえますけれども、私としてはそういった必要経費は内緒で予算を流用した

りなんたりするんじゃないか、とおおっぴらに各省庁ともですね、官邸だけじゃなくて、きちんと計上するということ形にした方がいいんじゃないかと個人的には思っています」と述べた。

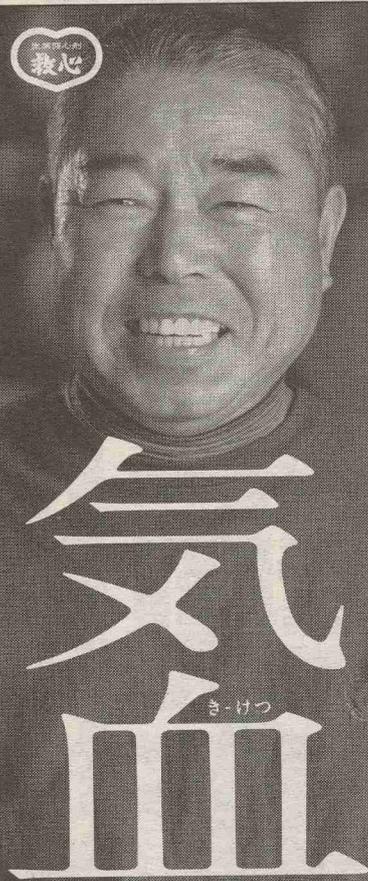
以前から使途公開の枠組み作りを主張してきた鳩山由紀夫首相、岡田克也外相に続いて、党側のトップまでが、使途公開を政府へ要望したのだ。普段なら「小沢の政府介入」と騒ぐ新聞・テレビは、なぜこの発言について報じないのか。

考えてみれば、鳩山、岡田、先進国では日本だけ世界各国で記者クラブ制度が残っているのは、日本以外ではガボンとジンバブエだけといわれる。韓国にも日

田、小沢各氏は、記者クラブにしか参加が許されなかった記者会見を「オープン化」してきた。一方の平野官房長官は、徹底して記者会見オープン化に抵抗し、いまだに自らの会見も記者クラブ以外には開放していない。機密費問題への対応と奇妙な一致を示してはいないか。もしこの問題でも平野官房長官が記者クラブメディアに取り込まれていくとすれば、「共犯関係」はいまも続いていることになる。この問題を私は引き続き追及してゆく。

本に似た記者クラブ制度があつたが、2003年の盧武鉉政権誕生以降、記者室使用などの既得権益を奪われた。

By The Way



「気血」とは、「気」の巡りと「血」の巡りを合わせた言葉。東洋医学が健康の基本におく言葉です。救心は生薬の働きで、自律神経のバランスを整え、血液の循環を良くし、どうき・息切れ・気つけに効果を現します。どうき・息切れ・気つけに



「血流いきいき読本」進呈 ハガキに①〒住所②氏名③年齢を明記の上、弊社お客様相談室WP係まで。頂いた情報は資料発送以外では使用しません。但し、個人を特定出来ない状態で統計データとして使用することがあります。

救心製薬株式会社

〒166-8533 東京都杉並区和田1-21-7 詳しくはホームページへ <http://www.kyushin.co.jp/>